史学論叢第44号（2014年3月）

研究ノート

ガリア・ナルボネンシスのアウグスターレース再考
― Quadronius Fidelis（CIL XII,4414）の場合―

山　本　晴　樹

ここにひとつの碑文がある（CIL XII,4414）。やや損傷があるが以下のように読み取れる。

《[.] Qu[a]dr[o]ni[o] / Fide[li] VIvir(o) A[ug(ustali)] / C(olonia) I(ulia) P(aterna) C(laudia) N(arbone) M(artio) e[t] / C(olonia) I(ulia) Aq[uis] Sext[is] / Chrysogonus / [l(ibetus)] fecit in a(gro) p(edes) XV.》

〈植民市ナルボと植民市アクアエ・セクスティアエのアウグスターレースである[　] Qu[a]-dr[o]nius Fide[lis]のために、[解放奴隷] Chrysogonusが（この石碑を）建てた。奥行15ペース。〉

Quadronius Fidelisなる人物（praenomenは伝わっていない）の石碑である。Fidelisの解放奴隷Chrysogonusがパトローヌスへ奉献しているわけである。このパトローヌスであるFidelisはナルボ（現ナルボンヌ）とアクアエ・セクスティアエ（現エクス）の二都市のアウグスターレースを勤めた。この石碑はナルボンヌ市内のPorte Royaleの囲壁から見つかっているので、おそらくかつてのフォールム近くに設置されたのであろう(1)。

これに関連してもう一つの碑文（*CIL* XII,4415 add.）も見てみよう。この石碑は現在のナルボンヌ市中のFabert通りとAncienne Porte Neuve通りが交差するあたりにあった囲壁から見つかっているので、おそらくこれもかつてのフォールム近くにあったものと思われる(2)。

《. . . . . / IiiiiI viro Aug . . . .　/ et col. Iul. . . .　/ C. Quadronius. . . . 》

〈[植民市ナルボ]と植民市[アクアエ・セクスティアエ]のアウグスターレース. . . .　のために、C.Quadronius [Chrysogonusが建てた]。〉

これまたきわめて損傷の多い碑文であるが、*CIL* XII,4414と対照させると上記のように解読される。すなわち、Fidelisの解放奴隷Chrysogonusがパトローヌスへ奉献していると思われるのである。従ってQuadronius Fidelisに奉献された二つの石碑はいずれもフォールムのおそらくアウグスター

レースに割り当てられた場所に設置されていたものと思われる。C. Quadronius Chrysogonusはパトローヌスの Fidelisのために二度、石碑（顕彰碑）をフォールム付近に建立しているのである。そしてChrysogonusは自分自身の石碑も建てている[3]。

筆者は以前、このエクスとナルボンヌという二つの都市のアウグスターレースの存在から、二つの都市の何らかのつながりを推測し、「都市間のネットワーク」というような漠然としたとらえ方をしていたのであるが[4]、その後の考古学の成果およびプロソポグラフィー研究の進展の結果、再考せざるをえなくなった。実はすでに島田誠氏は以下のような指摘をされていた[5]。

「ある都市でアウグスターレスを勤める解放奴隷の地位は、この職務に基づくものではない。都市による選出法の違いは、アウグスターレスの性格に影響しない。都市の諸階層、特に参事会との密接な関係も、成立期には認められず、後世に生じた二次的なものであった。本章で明らかにした以上の事実は、アウグスターレスと都市との関係を自明と考え、研究の範囲を都市内部に限定する従来の研究の前提を支持し難くする。アウグスターレスたちは、都市構造の問題とは別の観点からも研究されなければならない。」

島田氏の指摘は、あくまでも都市とのつながりのなかでアウグスターレースを考えていた当時の筆者には十分理解できなかった。しかし今回Quadronius Fidelisを通して、ガリア・ナルボネンシスのアウグスターレースを再考することで、あらためて氏の意味するところを感得した次第である。

*

筆者が再考せざるを得なくなったのは,Th.Frankeの論考[6]によってである。FrankeはQuadonius家の実に250年にもわたる歴史を考察した。FrankeはQuadroniusという名前がきわめて稀にしか現れないところから、この名前をもつ人々の間に何らかの人的結合関係を推定している。Frankeによれば、Quadronius家は元来はエクスの出身であったが、その後ナルボンヌを経てバルセロナへ移住し、後1世紀中頃からヒスパニア北東部のラエエタニア地方で大規模にブドウ酒を製造し、それをタラゴーナやバルセロナおよび南フランスやリグリア沿岸地帯そしてイタリアへまでも販売していた。Fidelisはバルセロナ在住のQuadronius家のナルボンヌにおける代理人（Agentur）であった。そしてQuadronius家は1世紀の終わりまでには騎士階級に昇格し、2世紀のはじめにはバルセロナで有力家系となり、二人の元老院議員と養子縁組みを結ぶまでになった。すなわち、バルセロナのL.Minicius Natalis[7]とタラゴーナのQ.Licinius Silvanus Granianus[8]である。従って、両者の息子はそれぞれL.Minicius Natalis Quadronius Verus[9]および、Q.Licinius Silvanus Granianus Quadronius Proculus[10]と名乗ることになる。FrankeはQuadronius Fidelisが単独のアウグスターレースではなく、あくまでもバルセロナ在住のQuadronius家の解放奴隷として活動していること

を指摘し、そしてこのQuadronius家が騎士階級として、ヒスパニアのバルセロナおよびタラゴーナの元老院議員家系と養子縁組によって結びついていくことを明らかにした(11)。

Frankeはナルボネンシスのニームにおいてもまた Quadronius家と関係する人物を見出している。すなわちT.Iulius Sex. f. Vol. Maximus Manlianus Brocchus Servilianus A. Quadron[ius Verus?] L. Servilius Vatia Cassius Cam[ars?]である。しかしこの人物が何故Quadroniusの名をもっているのかについては、Franke自身も明らかにはしていない(12)。

その後、Quadronius家をヒスパニアの騎士階級および元老院議員の家族戦略としての観点から取り上げたF. Des Boscs-Plateauxは、106年の補充コンスルQ.Licinius Silvanus Granianusがタラゴーナ出身のhomo novus（新人）であり、また同年の補充コンスルL.Minicius Natalisもバルセロナ出身のhomo novusであったこと、そして両者の息子がQuadroniusという名をもつところから、両者の父が二人ともQuadroniaなる女性（姉妹?）と結婚することによって、両家が同盟関係を形成したことを明らかにしている(13)。

Quadronius家がバルセロナを本拠地としたとするTh.Frankeに対して、ガリアにおける社会的流動性を研究したL.Wierschowskiは、ナルボンヌ出身のQuadronius家が、後にヒスパニア・タラコネンシスの元老院議員と養子縁組を結んだQuadronius家の直接的な先祖であったと指摘した。すなわちWierschowskiによれば、Quadronius家はナルボネンシスのナルボンヌからタラコネンシスのバルセロナへ移住したということになる。また、Wierschowskiは、このようにQuadronius家が富裕な家系となったのは交易によるものであり、その交易品はヒスパニア産オリーブオイルやワインであったとしている(14)。

逆にタラコネンシス側からナルボンヌへQuadronius家が移住したことを指摘するのが、M.L.Bonzangueである。Bonzangueによれば、Quadronius家はもともとエクス出身で、Fidelisはその解放奴隷であった。そしてこのQuadronius家は2世紀初めにバルセロナとニームの元老院家系と養子縁組を結んだ。バルセロナではMinicius家と、そしてニームではIulius Maximus家とである(15)。

＊＊

これまでQuadronius家の軌跡をたどってきたわけであるが、彼らの本拠地がナルボネンシスであるのか、あるいはタラコネンシスであるのか、筆者はにわかには判断できない。しかしいずれにせよQuadronius家は、ナルボネンシスとタラコネンシスの間で交易活動を行ってきた。とすれば、われわれが取り上げたFidelisがQuadronius家の解放奴隷として、Quadronius家と具体的にはどのような関係にあったのか、という問題がでてくるのであるが、このことについては現在までのところ明らかになっていない。

そのような中、パトローヌスの家系とその解放奴隷との関係を具体的に示す事例が、近年、ナル

ボネンシスではないがタラコネンシスにおいて知られるようになった。それは2006年にバルセロナ近郊のラエエタニアとよばれる地域にあるウィラ遺跡（Vallmora）から発見されたsignaculum（印章、タテ3,5cm、ヨコ6,6cm、厚さ1,2mm）によってである。そこには以下の銘が彫られていた[16]。

《 Epicteti L（uci）P（edani）/ Clementis 》

〈 L.Pedanius Clemens の（奴隷）Epictetusの（製品）〉

Epictetusはバルセロナの東部にあるラエエタニア地方の一ウィラ（Vallmora）においてその所有者L.Pedanius Clemensの奴隷であった。しかしEpictetusは、製品（アムフォラあるいはドーリウム）に自分の名を記すことの出来る存在であるので、単なる奴隷ではなくその監督（vilicus）あるいは製品の管理にあたる者（officinator）であったであろう。というのも彼は後に解放され、L.Pedanius Epictetusを名乗り、バルセロナのアウグスターレースになっているからである[17]。Epictetusの事例から、われわれは都市周辺農村部のウィラにおける奴隷監督者あるいはウィラ経営の代理人が解放され都市部に移住し、その都市のアウグスターレースになっている姿をみることができる。

興味深いことに彼のパトローヌスであるL.Pedanius Clemensもまた解放奴隷であり、バルセロナのアウグスターレースであった[18]。すなわち、アウグスターレースの団体のなかに、同じ家系に属し、そしてクリエンテーラ関係にあるものがみられるわけである。アウグスターレースも個々人の集合体ではなく、その内部には緊密な人的結合関係が存在したわけであり、一種の階層分化が現れているように思われる[19]。

＊＊＊

以上のようなバルセロナのEpictetusの事例は、ナルボンヌのFidelisについて考える場合大いに参考になるものと思われる。すなわち、Fidelisはもともとエクスにおいて奴隷であり、Quadronius家のウィラあるいは何らかの事業の経営を任された存在であった。その後解放され、Quadronius Fidelisを名乗り、エクスのアウグスターレースとなる。そしてパトローヌスとともにナルボンヌへ移住し、その地でもまたアウグスターレースとなった[20]。このようなFidelisの経歴がバルセロナのアウグスターレースEpictetusの事例から推測できるわけである。

筆者は当初、ナルボネンシスのエクスとナルボンヌの二つの都市のアウグスターレースを兼ねるQuadronius Fidelisをナルボネンシスにおける都市と都市との結びつきを象徴する存在として理解したわけであるが、そうではなく、Fidelisとパトローヌスとの関係がしからしめるものであった。そして、この関係はナルボネンシス一属州だけで完結するものではなく、隣接する属州タラ

コネンシスの都市バルセロナの有力家系Quadronius家との関係にも及ぶものであった。すなわち、Quadronius Fidelisは単独のアウグスターレースとして存在したわけではなく、Quadronius家の一員として、その地中海西部沿岸地帯での交易活動を担う一員として存在していたことになる[21]。

註

（1）碑文の最後に奥行き15ペース（約4.5m）と規定されているので、アウグスターレースのために割り当てられたフォールム付近の公的空間に設置されたものと思われる。間口は記載されていないが、他の碑文（*CIL* XII,4412）から判断して恐らく12ペース（約3.6m）であろう。もし都市参事会決議によって割り当てられた場所であるならば《l(oco) d(ato) d(ecurionum) d(ecreto)》の銘が最後に付されることになる（註(17)、註（18）参照）。ナルボンヌのアウグスターレースは、都市参事会とは独立した動きをしているので上記のような表現になっている。

（2）この石碑は現在はナルボンヌ北方CuxacのCourneauに移されている（*Carte Archéologique de la Gaule (CAG)*, 11/1,24-3. Cf.262[camp.] 61 Fig.276）。

（3）*CIL* XII,5081：《C.Quadronius / Chrysogonus sibi et Aemiliae Censorinae》この石碑はナルボンヌ郊外南西部の聖パウロ教会付近で見つかっている。かつてはそこはナルボンヌ住民の墓地であったであろうから、Chrysogonusは、自身と妻Aemilia Censorinaのために、おそらく墓碑を建立したものと思われる。

（4）拙稿「帝政初期イタリア・西部属州の都市におけるアウグスターレース」『西洋史学論集』（九州西洋史学会）31（1993年）9頁。

（5）島田誠「元首政期のローマ市民団と解放奴隷」『史学雑誌』第95編第3号（1986年）11頁

（6）Franke, Th., Quadronius - sozialer Aufstieg in 250 Jahren?, *Laverna* IV（1973）, 69-80.

（7）E.Groag, *RE* XV（1932）1828ff.；*PIR* M 619.

（8）A.Stein, *RE* XIII（1926）459；*PIR* L 247.

（9）E.Groag, *RE* XV（1932）1836ff.；*PIR* M 620.

（10）E.Groag, *RE* XIII（1926）459ff.；*PIR* L 249.

（11）バルセロナのMinicius家および後述のPedanius家そしてタラゴーナのLicinius家はそれぞれの都市における有力家系であるので、その人的結合関係はあらためて考察される必要がある。

（12）*CIL* XII,3167 Cf.E.Groag *RE* X,1(1918), col.678f.；*PIR*^{2} I 426；*CAG* 11/1,464-4（ニーム市内の square de la Couronneで発見、現在はニーム考古博物館所蔵）。またナルボネンシスの名望家の経歴を研究したH.-G. Pflaum（*Les fastes de la province de Narbonnaise*, Paris 1978,317-319）や、ニーム出身の元老院議員を研究したY.Burnand（Sénateurs et chevaliers romains originaires de la cité de Nîmes sous le Haut-Empire：étude prosopographique, *MEFRA*, 87,2(1975),681-791,754-760(XIII S4),Fig.8）も明確には言及していない。これに対して、最近ローマ元老院議員家系とその出身地との関係を研究したA.Krieckhausは、この人物が112年の補充コンスル（cos. suf.）であるとともに、タラコネンシスの一地域のパトローヌスでもあるところから、バルセロナのQuadronius家との親族関係を想定している。そして更に、ナ

ルボンヌに現れるQuadroniusを名乗る人々はバルセロナのこの家族の解放奴隷であると考えている。Cf.Krieckhaus, A., *Senatorische Familien und ihre patriae（1./2. Jahrhundert n.Chr.）*,Hamburg 2006, 94-114, 97 n.16.

（13）Des Boscs-Plateaux, F.,Les stratégies familiales des chevaliers et sénateurs hispano-romains（Ier siècle-première moitié du IIe siècle ap.J.-C.）, *Mélanges de la Casa de Velazquez（MCV）*,1995,XXXI（1）,113-171,151n.208. Cf.Syme,R. *Roman Papers* IV,89.100.165 V,604.

（14）Wierschowski,L., *Fremden in Gallien —" Gallier" in der Fremde,* Stuttgart 2001,212-214 no.278.

（15）Bonzangue,M.L.,Des affaires et des hommes：entre l'emporion de Narbonne et la Péninsule Ibérique（Ier siècle a.C.- Ier siècle p.C.）, *Migrare：la formation des élites dans l'Hispanie romaine,* Bordeaux 2006.15-68,36n.95.不思議なことに、BonzangueはQuadronius家がタラゴーナの元老院議員家系であるLicinius家と養子縁組を結んでいることについては言及していない。

（16）Martìn,A., Rodà, I., Velasco,C., Cella vinaria de Valimora（Teià, Barcelona）un modelo de explotación vitivinícola intensiva en la Layetania, Hispania Citerior（s.1a.C. - s.V d.C.）, *Historia Antiqua,* 15（2007）, 195-211,204 Fig.9.

（17）*CIL* II,6155.この石碑はバルセロナのフォールム近くで発見されている。Cf.Fabre,G., Mayer, M., Rodà,I.,*Inscriptions Romaines de Catalogne（IRC）* IV.Barcino, Paris 1997, 189ff.（106.Pl.LVI et fig.8）：《L（ucio）[Pedani]o / [L（uci）L（iberto）] / Epicteto / IiiiiI vir（o）Aug（ustali）/ Acilia Arethusa / marito / optimo / l（oco）d（ato）d（ecurionum）d（ecreto）》

（18）*CIL* II,4549. *IRC* 105：《[L（ucio）P]edanio / [Clementini] / lib（erto）/ Clementi / IiiiiIvir Aug（ustali）/ Maximinus lib（etus）/ [P]atrono optimo / [loco] d（ato）d（ecurionum）d（ecreto）》.Cf.Etienne,R., *Le culte impérial dans la péninsule ibérique d'Auguste à Dioclétien,* Paris 1974, 260.

（19）だとすれば、例えばナルボネンシスの事例であるが、ニームのアウグスターレースのなかに、decurio ornamentariusの称号を持つものと持たないものがいる。これもアウグスターレースの中での階層分化の表れかもしれない。またナルボンヌのアウグスターレースのなかには、正式な都市名称（C.I.P.C.N.M.）を付けたものと付けないものがおり、これまた一つの階層分化のあらわれかもしれない。Cf.Gayraud,M., *Narbonne antique,* Paris 1981,370f.；拙稿「ローマ帝政期ナルボネンシスの都市とアウグスターレース―ナルボとネマウススを中心に―」『史学論叢』（別府大学史学研究会）第26号（1995年）6頁。

（20）パトローヌスとともにタラゴーナからナルボンヌへ移住し、そのナルボンヌでアウグスターレースとなった事例としてL.Afranius Cerialis l. Erosがいる（*CIL* XII, 4377）。Cf.Bonzangue, *op.cit*.,39-43；拙稿「ルーキウス・アーフラニウス・エロース ― タラゴーナとナルボンヌの間で ―」『史学論叢』第38号（2008年）49-55頁。

（21）タラコネンシスとナルボネンシスの間での人的・物的交流については、因みに『ナルボネンシス考古学雑誌（*RAN*）』45（2012年）のフランス南部ベジエ近郊のAspiranで発掘されたvilla遺跡の報告を参照されたい。これに関連して筆者にとって示唆的であったのは、南雲泰輔氏の論考「古代地中海世界と日本」

＜特輯 西洋古代史の語り方―現代日本社会のために＞季刊『古代文化』第65巻第1号（2013年6月）93-106頁）である。この論考において南雲氏は、P.Hoden and N. Purcell,*The Corrupting Sea：A Study of Mediterranean History*（Oxford 2000）を取り上げ､｢あらゆる時代の地中海世界は､小さな下位単位（tiny sub-regions）とそれより大きな下位地域群（larger groups of sub-regions）」の巨大な集塊として理解されねばならない。」（p.343）という主張を紹介している（96頁）。この言葉は今後、ローマ帝政期地中海西部沿岸地帯の人的・物的交流を考える筆者にとって、ひとつの指針となるように思われる。

résumé

Reconsidération sur les sévirs augustaux en Narbonnaise：en cas de Quadronius Fidelis（CIL XII,4414）

Selon CIL XII 4414, Quadronius Fidelis était sévir augustal à Narbonne et à Aix. Autrefois j'ai pensé qu'il y avait une sorte de la relation interrégionale et horizontale entre Narbonne et Aix. Mais ce n'est pas vrai. Fidelis était affranchi de la famille de Quadronius et il travaillait en tant que l'agent dans l'entrprise commerciale de la famille de Quadronius à Narobnne et à Aix. La famille de Quadronius était grand négociant en vins en Tarraconaise. Et récemmment J'ai su qu'un homme Epictetus était un esclave（vilicus ou officinator）dans une villa de L.Pedanius Clemens dans la région Laeetania. Ensuite Epictetus était affranchi et il（L.Pedanius Epictetus）était devenu sévir augustal à Barcelone（*CIL* II,6155）. Il me semble que Fidelis vit la même vie à Aix et à Narbonne que Epictetus à Barcelone.

YAMAMOTO Haruki
Université de Beppu（Japon）